

2030 SDGsで変える

次世代のアイデア 地域に

公共バスについてフィールドワークをする学生たち11月2日、岡山市



岡山市

交通弱者問題 声聞き探る

岡山学芸館高校と甲南大学の計8人のチームは、移動への不便さを感じている「交通弱者」の問題に焦点をあてた。チームが同高校の生徒220人にアンケートをすると、約4割が交通の不便さを感じていた。岡山市内各地をバスや電車で実際に移動もしてみた。地域によってはバスは1時間に2〜3本。待合スペースが狭い上に交通量の多い道路と接するなど危険を感じる場所もあった。同高校2年の水田有美さんは「休日は電車で乗り遅れると2時間待たな

き問題だと感じた」と話す。同市の富山学区で病院への送迎など高齢者の移動支援をする有償ボランティア団体への聞き取りも実施。支援の担い手が高齢化するなど人手不足が進み、現場の負担が増していることがわかった。チームは、同市中心部で展開されているシェアサイクルの利用地域を広げ、高齢者も使いやすくなる。空き家を活用して安全なバスの待合所を作り、地域交流の結節点にすることも提案した。甲南大3年の福井颯斗さんは「交通弱者は高齢者に注目が集まりがちだが、全世代共通で解決するべき問題だと感じた」と話す。

徳島市

平時の習慣 災害の備えに

災害の被害を減らすために何ができるのか。多くの河川が流れ、低地が広がる徳島市は、大雨や高潮、津波の被害を受けやすく、南海トラフ地震にも直面する。チームは、市の担当課や民間団体、移動販売車で地域の見守りもする企業へのヒアリングでリスクや防災意識の現状を学んだ。

解決策を考える際に注目したのは、1938年の阪神大水害後に「常に備えよ」と戒めた甲南学園創立者の平生鈆三郎の言葉だった。平時から防災を意識することは難し

い。備えられないならば「結果的に備えている状態」をつくれなにかを考え、日常と非日常を区別せず、生活の質を高めつつ防災にもつなげる「フェーズフリー」の考え方に行き着いた。具体案の一つは、避難ルートウォーキングコースにすることだ。体力維持の習慣が災害時に役立つ。すぐにも実践できるアイデアだ。

徳島県出身で甲南大マネジメント創造学部2年の中川彩優香さんは「防災について学ぶ機会になり、徳島は人とのつながりが

「関西湾岸SDGsチャレンジ」5チームが挑んだ課題



神戸市

環境守る意識 探検で育む

人口150万人の大都市でありながら、六甲山や海、田園地帯を持つ神戸市。恵みをもたらす生物多様性をどう守るか。甲南大と甲南高の計8人のチームは壮大なテーマに挑戦した。

何が生態系を脅かすのか。チームは、外来生物に特化した啓発施設「外来生物展示センター」(神戸市)を訪問。アメリカザリガニやアライグマがもたらす被害や、元は人間が持ち込んだ歴史を学んだ。ただ来場者の大半は大人。若年層が少ないことが気になった。

里山の再生活動に取り組む団体の学生に話を聞くと、幼少期から自然と接している人が多かった。地道な活動を苦行にしないため「ワクワク」も大事——。環境の意識を芽生えさせるには小学生の時の体験がカギと考えた。

提案したのは、市内の里山などで専門家と一緒に動植物を観察できる夏の



里山再生の取り組みを取材するメンバー10月12日、神戸市、甲南大の佐藤圭・准教授提供

探検イベント。外来種を見たり、鳴き声を聞いたりして、生物多様性を学べる。書き込めばそのまま学校の自由研究として提出できる用紙をつくり、暑さ対策で朝と夜の2部制にするなど工夫もした。甲南大文学部3年の楠本花梨さんは「生態系は壊れてしまったら二度と元通りにはならない。環境を守る大切さを伝えたい」と振り返った。



移動スーパー「とくし丸」の説明を聞くメンバー=8月22日、徳島市

強いことがわかった。日常で自分も取り組めることがありそう」と振り返る。

徳島市立高校2年の石井宏樹さんは「貴重な体験で得た視点は、大学生や社会人になっても役立つと思う」と話した。

持続可能な社会を目指し、甲南大学生と地元の高校生が地域の課題に取り組むイベント「関西湾岸SDGsチャレンジ」(主催=甲南大学、朝日新聞社メディア事業本部、後援=神戸市、堺市、和歌山市、徳島市、岡山市)が7月から11月にあった。甲南大(神戸市東灘区)の学生と高校生が5チームに分かれ、自治体を担当。現地でのフィールドワークを通じて解決策を探り、11月17日に甲南大で発表した。



成果を発表する堺市チームのメンバー=神戸市

堺市

子育て支援策 PRを改良

チームは、市内の子育て支援施設の利用者80人超にアンケートを実施。育児関連の情報を入手する経路を聞いた。すると受動的には公共空間のチラシやポスター、能動的にはWEBで情報を得ることが多いと分かった。この結果から、二つの策を提案した。一つ目は駅など多くの人がいる場所に市の子育て施策を知らせる紙媒体を貼り出したり、置いたりすること。二つ目は市の子育て関連のサイトを改良し、子どもの年齢による検索機能をつけたり、できるだけ平易な言葉を使ったりすること。利用者目線で情報の得やすさを重視した。堺高校2年の田中紫晴さんは「将来大人になったときのことを考えると、堺は住みやすい場所だと思った」。甲南大1年の豊田隼太郎さんは「子育て世代や施設の職員、予算が限られた市職員などいろいろな視点で物事を考えられた」という。

和歌山市

空き家減へ 関係人口創出



成果を発表する和歌山市チームのメンバー11神戸市

「将来は和歌山を出て行きたい」。県外への進学や就職を希望する市立和歌山高の生徒が少なくないと知り、同校と甲南大生の計8人で作るチームは、和歌山市を住みやすい街にして人口減少を防ぐことを目指した。

チームは特に空き家問題の解決策を検討。今年8月には、2日間にわたって市内で聞き取り調査をした。県地域振興課に空き家対策について聞いたり、地元の不動産業者に賃貸物件の入居率などを教えてもらったり。子育て世代の移住者にも引っ越してきた理由を尋ねた。

その上で、チームで議論。空き家を減らし、人口減少も防ぐ

ための方法として「関係人口」に目をつけた。「関係人口」とは、移住者でも観光客でもなく、地域や、地域の人々と多様に関わる人を指す。

「関係人口」の創出のため、市外から来た人が地域情報をもらえて、地元の人との交流もできる「まちの駅」を増やすことなどを提案した。

取り組みが評価され、最優秀賞に輝いた。甲南大経済学部3年の星加輝さんは「活動を通じて、和歌山で働いてみたいと思った」と話した。

市立和歌山高校3年の山本莉里さんは「住んでいても気付かなかった和歌山の魅力を再発見できた」と笑顔だった。